

いちのたにふたばぐんき

## 一谷嫩軍記

〔解説〕宝暦元年（一七五二）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書いたものの、この段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させました。

〔このまでのあらすじ〕源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「二枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣します。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆき、後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰ります。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行きます。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよっていました。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようしますが、靡かぬのに腹を立てて、姫を刀で刺してしまいます。

〈組討の段〉一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせますが、熊谷が勝負を挑んで呼び止めます。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷きます。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけますが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼みます。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、敦盛を逃がそうとしますが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討ち落とします。（そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶えます。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのです。）

## 組討の段

去る程に、御船みふねを始めて、一門皆々船に浮かめば

乗り後れじと、汀みぎわに打寄れば、御座船ござふねも兵船も、遙

かにのび給ふ。無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、

御座船に馳着いて、父経盛に身の上を告げ知らすこ

とありと、須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあ

らざれば詮方波せんかたに駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給

ふ。かゝりけるところに後より、熊谷次郎直実。

「ヲ、イ〜」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。

正ただなうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。

かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せ

ん返させ給へ」

と、扇を上げて指招き、

「暫し〜」

と呼ばはったり。敵に声をかけられて何か猶予のあ

るべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひ

に打物抜きかざし、朝日に輝く剣つるぎの稲妻かけ寄り、

かけ寄せちやう〜、蝶の羽がへし諸鎧もろあがみ、駒の

足並かつしかつし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖は

ひら〜。群れある千鳥村千鳥むら〜ぱつと、

引汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々

実々。勝負も果てしあらざれば、

「いそふれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしほらし」

と熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ、馬上ながらむず

と組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鎧を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて押へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名譽を顕はし給へ。又今生こんじょうに何事にても思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

と懇ねんころに申すにぞ。敦盛御声爽かに、

「フ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんこと生前しょうぜんの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れ

がたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛の末子ばっし、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひく、

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早うく」といひ捨てゝ立別れんとするところに、後の山より武者所数多あまたの軍兵。

「ヤア／＼熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きやつめ共に遁すな」と声々に罵るにぞ、熊谷ははつとばかり、『いかゞは

せん』と默然<sup>もくねん</sup>たり。敦盛卿しとやかに、

「とても通れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて  
下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御  
身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給  
へば、いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥  
陀の利剣と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の  
様な御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く気  
後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ  
討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、

「ア、愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招  
けとはこの事。早首討つてなき後の回向を頼む、さ  
もなくば生害せん」

とすゝめられ、

「ア、是非なし」

とつつ立上り

「順縁逆縁俱に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。

あつもりのさい

## 平家《敦盛最期》より

木曾義仲に都を追われた平家は、四国の屋島を根拠地として態勢を立て直し、一の谷に陣を敷いて、京都奪回の機会を狙います。源頼朝の命で木曾義仲追討を果たした源範頼と義経は、一の谷を攻略します。義経の鶉越の奇襲が功を奏し、平家一門は大敗を喫し、多くの武将が命を落とします。中でも清盛の孫敦盛の健気な最期は人々の心を打ち、能や浄瑠璃など、後の芸能にも多く採り上げられました。語りの伝承は失われましたが、平家の譜本を手掛かりに二〇一八年に平家語り研究会で復元しました。

東国武者の熊谷次郎直実は、須磨の浜に出て、一の谷の合戦を逃れて沖の船に逃れようとする武将を見つけます。呼び戻して組み敷き、首を取ろうと兜を押しつけて顔を見れば、我が子と同じ年頃の美しい若武者、その立派な態度に、熊谷は何とか逃してやりたいと思いますが、後ろから押し寄せる味方の手前、それも叶わず、泣く泣く首を取ります。このことがきっかけとなり、後に、熊谷は出家します。

なお、詞章の中に曲節（節のパターンの名前）を〔口説〕のように書き込んであります。〔口説〕は地の語りで、言葉のアクセントに従い単純に上下する旋律が付いています。〔白声〕は、節のない語りです。〔折声〕は感慨、嘆き、あるいは宗教的な感動などに用いられます。〔中音〕は優雅優美な曲節で、広く用いられます。

〔口説〕 去る程に一の谷の軍破れにしかば、

武蔵の国の住人、熊谷の次郎直実は、平家の公達

たちの助け舟に乘らんとて、汀の方へや落ち行き

給ふらん、天晴よい敵に逢ふて組まばやと思ひ、

渚を指して歩まする所に、爰に練ぬきに鶴縫ふた

る直垂に、萌黄匂ひの鎧着て、鍬形打つたる甲の

緒をしめ、金作りの太刀を帶き、廿四指いたるき

りうの矢負ひ、滋藤の弓もつて、連錢葦毛なる馬

に、金覆輪の鞍を置いて、乗り給ひたりける武者

一騎、海へざつと打ち入れ、沖なる船に目をかけ

て、五六段ばかりぞおよがせらる、熊谷あれはいか

に、よき大將軍とこそ見參らせて候へ、まさなう

も敵に後を見せさせたまふ物かな、かへさせ給へ

かへさせ給へと、扇をあげてまねきければ、招か

れて取つてかへし、渚に打ち上がらんとし給ふ所

を、熊谷波打ちぎわにて押しならべ、むづとくんで

どうど落ち、取つておさへて首をかゝんとて、内

甲を押しあふのけて見たりければ、年のよわひ、

〔強り下ゲ〕十六か七かの殿上人の薄化粧してか

ね黒なり、「白声」我が子の小次郎がよわひほどに

て、容顔誠に美麗なりければ、いづくに刀を立つ

べしとも覚え、熊谷 如何なる人にてわたらせ給

ふぞ名乗らせ給へ、助け進らせんと申しければ、斯

いふ汝は何者ぞ、名乗れ聞こふぞ宣へば、物その

者にては候わねども、武蔵の国の住人、熊谷の

次郎直実と「ハヅミ」名乗り申す、「口説」偕は汝

に逢ふては名乗るまじみぞ、名のらずとも「下ゲ」

首をとつて人にとへ、見しらうずるぞとぞ、宣ひ

ける、「折声」熊谷、天晴大將軍や、此人一人討ち

奉つたりとも、負くべき軍に、勝つ事はよもあら

じ、又助け奉つたりとも、勝ち軍に、負くる事

は、よもあらじ、「口説」我が子の小次郎けさ一の

谷にて薄手おふたるをだにも、直実はこころぐるし

う覚ゆるに、討たれ給ひぬと聞き給ひて、此殿の父

さこそは歎き悲しみ給はんずらめ、いかにもして助

けまゐらせんとて後をかへり見たりければ、土肥

梶原五十騎ばかりで「下ゲ」出きたり、熊谷泪を

はらくと、流ひて、「折声」あれご覧候へ、助け

参らせんとは、ぞんじ候へども、味方の軍兵、

雲霞のごとく満ちく／＼、よものがしまいらせ候

はじ、「指声」あはれおなじうは、直実が手につけ

奉つてこそ、後の御孝養をも、仕まいらせ候は

めと申ければ、只何さまとう／＼、首をとれとぞ

宣ひける、「中音」熊谷あまりに、いとをしめて、

いづくに刀を、立つべしとも、覚え、目もくれ

心もきへはてゝ、前後不覚に、覚えけれども、偕  
しも有べき、事ならねば、なく／＼首をぞ、かいて  
んげる、

げんぺいぬのびきのたき

## 源平布引滝

【解説】並木千柳、三好松洛の合作。寛永二年（一七四九）年、大坂竹本座初演。

五段続きの時代物。「平治の乱」以後、再興を期す源氏の武將らを中心に、さまざまな人々の思いが複雑に絡み合った物語です。現行の「松波琵琶」は、天保八年（一八三七）に増補改作されたものです。

【あらすじ】平治の乱で、源氏を破った平清盛は、源氏の再興を恐れて一族の男子を根絶やしにせんと躍起になります。

よしかた

源義朝の弟、木曾義賢は身重の妻、葵御前と源氏の白旗を、源氏一門の多田蔵人行綱の妻、小万と親の九郎助に託し、

ゆきつな

こまん

せのおじゅうろう

自身は壮絶な最期を遂げます。葵御前は無事に男子（のちの木曾義仲）を産むのですが、斉藤実盛と瀬尾十郎が葵御前の産む子を検分するためにやって来ます。女子なら命を助けると言うのです。九郎助は、湖で綱にかかった女の腕を差し出し、葵御前が産んだのはこの腕だと言います。実は、この腕は実盛に切り落とされた小万の腕でした。その後、瀬尾十郎は小万の子、太郎吉に刺され絶命します。

〈松波琵琶の段〉多田蔵人行綱は琵琶の名手松波検校に化け、鳥羽離宮に入り込めます。しかし先に入っていた娘の小桜

が父の名を調べられて拷問を受けるのを目のあたりにして、娘を助け逃げます。追っ手と戦う多田蔵人行綱の前に現れたのは平重盛で、二人は戦場での再会を約束して別れます。

しげもり



## 松波琵琶の段

奥御殿より松波檢校下るも仮の探り足、聞けばわが子の泣き声に轟く胸もいた縁先歩みかねて立止り

「イヤ申し聞きますれば、どうか年のいかぬ子を御折檻なさるゝやうす、じたいマアどうしたことござります」

「さればお檢校、マア／＼聞かれい。この女郎めが親は源氏の残党多田蔵人行綱」

「エ、」

「イヤサ蔵人行綱と睨んだ眼は違やせぬて。」

へ、へ、白状せよと責め苛めど、迂闊にぬかさぬ  
胴張者。それでかうしてはいすのぢや」

と腕を限りの続け打ち

打たるゝ身より

聞く親が、堪ゆる辛さは百双倍。瞼にそゝぐ血の涙  
平次はそれと舌なめずり

「サア女郎め、いよ／＼ぬかさやコリヤこの木の空へ釣上げ、この世あの世の境を見せるぞよ。サアぬかせエ、ぬかせやい」

「アレ／＼イ、ヤ知らぬ、たとへどのやうに責められても、知らぬことはいつまでも知らぬはいの」

「エ、しぶとい奴ぢや／＼ぬかせぬかいの」

「ア、いかさま片意地な生れ性、それ程の責めに合ふても親の詞をきつと守り、我氏素姓を明かさぬとはヲ、しほらしい」

「ヤア」

「ハ、／＼、よういひ含めたものぢやな」

と紛らかす

「へ、／＼、そろ／＼詮議の糸口が見ゆるは／＼。」

ハ、ハ、ヤその糸口で思い出した。イヤナニ御坊。

おりやそなたにちと無心があるはいの」

「ム、手前に無心とはな」

「イヤ他でもない、大内に奉公はすれどつひにこれまでその琵琶とやらを聞いたことがない。何とこゝでちよつと弾いて聞かせぬか」

「エ、サアそれは」

「弾かれまい〜。こればかりは機嫌らしい弾かれぬ筈ぢやテハ、琵琶は女媧氏の作にして、廉妾夫じよかしより日の本に伝はる。十二の律管に五音をわかち、内心に愁ひあれば音律に頭はるゝ、四筋の糸の善悪邪正。迂闊には弾かれまいハ、ハ、ハ。琵琶がならずばいつそこへ下りてこの小倅詮議して下んせぬか」

「ア、やくたいたいもない琵琶はまだしも手馴れし業、胴慾なげにその詮議が」

「サアそんなら一曲聞かしてくだあれ」

「サアそれは」

「詮議してくれる氣か」

「サア」

「琵琶を弾くか」

「サア」

「サア〜」

「サア」

「サア〜御坊返事はどうぞごんす」

と否といはさぬ詞の鏖、打ちつけに

望む一もつ松波が、胸にさぐなみ立騒ぐ。

琵琶の湖水の調子口。『乱るゝ心知らせまじ。悟られまじ』と是非なくも、手に取り上ぐる琵琶の音の、調べもしどろ恩愛の血筋四筋の糸筋に

へいざや諷はんこれとても浮世は夢の現とや、さは

あれど恩愛のなか、心とどまつて、腸を断ち魂を動かさずといふことなし

「ア、琴や三味線とは違ふて、イヤまた格別なものぢやナ。ハ、ハ、ハ、ドレこの間にまた一責め。サア女郎め。ありやうにぬかせ、ヤぬかさにやかう」

と縄先取り、梢へぐつと引上げられ小腕も抜ける四苦八苦

「アレ術ないくくはいのう」

へかの芝蘭の契りの袂には屍を愁嘆の炎に焦せども、紅蓮の水解くることなし

わが子は目前地獄の責め、揚げつおろしつ幾度か紅葉の古木は剣の山、取乱さじと喰ひ縛る。胸は七重の厚氷、解けて流るゝ行綱が、涙せきくる滝津浪、膝に溺なすばかりなり

歎きの油断見済まして、箒に仕込みしあら身の刀、

抜くよと見えし稻妻や

「行綱覚悟」

と切込む平次

『心得たり』と身をかはし、我子を小脇にかい込んで、抜けつ潜りつ飛鳥のごとく、刀たぐつて脾腹を一当て

『うん』とたどろぐその隙に

奥庭さして駆込んだり

平次は無念の大音上

「ヤア／＼松波検校こそ源氏の残党、多田の蔵人行綱に相違なき条、難波の六郎見届けたり」

と呼ばはる間もなく越中上総

「とくよりこれに」

と以前の仕丁。用意の胴丸小手脛当庭上に駆けつくれば

「ヤア／＼方がた、多田蔵人行綱は、紅葉の林へ逃  
込みしぞ。われは帝を守護の役、御油断あるな」

と制する六郎

聞くより駆け出す二人の勇士。人数を配る御殿の騒  
動上を下へと返しけり

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。  
ご了承ください。